

[巻頭言]

「国際交流の薦め」

東北文化学園大学医療福祉学部リハビリテーション学科視覚機能学専攻

佐々木 一之

年頭にあたり、小山理事長、高坂学長の両先生より、本学も新たな大学改革を目ざすべき節目を迎えており、教職員各位の一層の協力を望みたいとお話があった。我が国も今や少子化時代に突入したが、これに追い討ちをかけるような経済状態悪化の現状下では、大学経営も弱肉強食時代に入ったと言っても過言ではない。これに対する積極的な打開策を教職員皆で考えていこうと言うのが、年頭の両先生の呼びかけであったと私は理解している。方策はいろいろあろうが、東北文化学園大学の特色として外部から注目されるような独自の試みが重要であろう。

私がこれまで当たり前と置いていたことで、本学ではまだ確立していないと感じるものの一つに「大学間の国際交流」がある。長い歴史をもつ国公立・私立大学は別として、本学のような規模の大学における国際交流として、欧米・アジア諸国の大学との教職員相互の研究の交流、及び学生間の交換交流が考えられる。私は前職の大学で長らくこのようなプロジェクトに関わっていたこともあり、そのはかりしれないメリットを実体験している。

私共の視覚機能学専攻では、公的助成による国際共同研究を契機に、台湾の中山大学視光学系学科と、片道交流（台湾学生の本専攻での短期研修）ではあるが、2009年度から独自に国際交流を試み始めている。本学としては初めての慣れない試みであったため、事務の方々にも多大のご面倒をおかけし、私たち教員も学生も共に相当な緊張感を持って彼らを迎えたが、成功裡に交流プログラムを終了し、誰もがこの試みの意義を理解し得たように思われる。何よりも先方の満足度は我々以上のものがあり、今後の継続を強く希望してこられたため、2010年度には第2回目の学生・教員の研修を受け入れた。2回目と言うこともあり、事務的な問題は全てクリア済みでスムーズに事が運んだが、私共視覚機能学専攻の受け入れ態勢としては、台湾学生への特別授業および特別演習、本学学生との合同授業、合同ゼミナール、学生主導による交流会などを準備した。お互いのコミュニケーションは英語が主体となるわけで、講義・演習はすべて英語で行い、担当教員には準備のために大きな負担をかけたが、合同授業ともなると、本学の専攻学生も共にその授業を受けるため、彼らなりにこれまで以上に刺戟を感じている様子が窺え、また教員の努力もそれなりに理解してくれたようである。親の背をみて子は育つと言うが、学生諸君は我々の背をみて感じるものがあつたと信じたい。このような試みの継続の意義を大学の皆様がたに理解して頂けることを切望しているが、これを機に、本学では、今後中国・韓国の大学との交流を積極的に進めていく方針とも聞いている。いずれはリハビリテーション学科他専攻の学生を先方の大学に研修に送り出すことも期待されるところであり、是非、教員・学生にとり実りのある交流に育って欲しいものである。キャンパスの中で外国語が飛び交う光景が当たり前の姿としてみられるようになれば、これは東北文化学園大学の大きな特色となろう。一般大学としては、決して早い取り組みではないが、全学が一本の筋の通った方向性を持った上で、各学部、学科毎に独自の工夫を加えれば、徐々にではあるが、必ずやその成果が現れるものと思われる。このような交流が軌道にのれば、本紀要の相互交換も当然ながら始まるはずである。交流大学に送るに恥じない学術誌たるべく、研究成果の報告にも心して取り組まれることを期待したい。